



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アメと包み紙
Author(s)	加部, 勇一郎
Citation	連環画研究, 4, 139-156
Issue Date	2015-02-01
DOI	https://doi.org/10.14943/2115.98419
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98419
Type	departmental bulletin paper
File Information	renkanga_4_139-156.pdf



アメと包み紙

加部 勇一郎

アメと中国人

アメは中国人に欠かせない。^{ジアジャンクー}賈樟柯監督の『^{エレジー}長江哀歌』(原題『三峡好人』、2006)は、中国人の交際の必需品として「酒、茶、タバコ、アメ」の四種を提示しながら、それらをみずから享受し、またあいさつ代わりに周囲に振る舞う人々を、極めて自然に画面に盛りこんでいる。中国を旅したことのある人なら、この四種の品の選択がきわめて妥当なものであることを、実感した経験があるだろう。

^{ジャンイーモウ}張芸謀監督の『サンザシの樹の下で』(原題『山楂樹之恋』、2010)は、このことについてより意図的で、冒頭、お互いを気にし始めた男女の交流の場において、アメが重要な役割を果たしている。^{ラオサン}老三の差し出すアメを、^{ジンチウ}静秋が「子どもじゃないわ(給小孩兒喫吧)」と断ると、老三が「子どもじゃなきゃ食べちゃダメかい?(不是小孩兒就不能喫糖了?)」と笑いながら返し、次いで彼に抱きかかえられた少女がそれを口まねすることで、二人の緊張がにわかにはぐれるのである。アメの提示がまだぎこちない二人の距離をぐんと近づけ、気になる異性にはにかむ静秋の甘い表情を見事に引きだしている。

アメが演出するのは、そんな甘い場面ばかりではない。^{グーチャンウェイ}顧長衛監督の『孔雀』(原題同じ、2004)は、文革直後の家族五人の物語であるが、そこに描かれる「分糖塊」の場面は、アメを中心に置きながらも、とても重苦しいものだ。「分糖塊」は年末などに^{アメ}糖塊を家族で分けるイベントをいう。画面は大晦日の日、四角い机を囲んで、母親と兄、妹、弟の三人兄弟が坐っている。彼らの視線の先には、机に撒かれたアメがある。期待に胸を膨らませる子どもたち。しかし母親は、少し智慧の遅れた長男を溺愛するあまり、下の子ども二人に「お兄ちゃんに五個ずつあげなさい」と言いつける。とたんに彼らの顔つきが変わる。母親は長男を気にかけるあまり、下の子どもの気持ちを斟酌する余裕を持たないのである。渋々と妹たちから渡されたアメを、当たり前のように^{かこ}囲う長男。彼の純真で悪気のない笑顔が、さらに憎らしい。口惜しさのあまり^{うつむ}俯く二人。兄弟姉妹を持つものならば「こいつさえいなければ」と思う瞬間が、誰しも一度はあったはずだ。映画『孔雀』には、甘い物が貴重であった時代の苦しい出が、アメという品で逆説的に描出されていると言えるだろう。

ハルピン生まれの画家である^{せいじょ}静茹もまた、「分糖塊」については、いささかの悲し

げな思いがあるらしい。彼女は以下のように、大晦日に二人の姉とアメを分けた思い出を、自ら描いた画像とともに記している。

映画『孔雀』の「分糖塊」の場面を見て、わたしは涙をこらえることができなかった。60、70年代生まれのものにとって、舌の思い出とは、塩辛いおかずであって、アメ玉やクリームではない。わたしたちにとってアメを食べることは、じつに贅沢に過ぎることであった。

三十日の午前になってようやく、母はアメを取り出して来て、わたしたちに分け与える。母が一つ一つ数え、余りが出るとみなわたしのものになった。それが済むとわたしたちは各々アメを持って行った。一番上の姉は自分で引き出しを持っていて、そこに入れて鍵をかけてしまうが、わたしは幼く、我慢できずにさっさと食べきってしまう。二人の姉は自制心が強く、どちらも十五日を過ぎても残っていて、わたしをうらやましがらせたのだった。



1. 大晦日の「分糖塊」

(静茹『回憶我的70年代』、上海人民出版社、2013、17頁より。図1は挿絵)

本稿では以下、アメと包み紙に焦点を当てながら、主にそれに関わってきた子どもたちを眺めて行きたい。時代は建国後から文革期までくらいを対象とする。アメはこの時期、まったく手に入らないものでもなかったようだが、今ほど頻繁にありつけるものでもなかった。そして子どもたちの渴望こそが、それを価値ある物へと押し上げる力となっている。

アメ文化概説

本題に入る前に、アメにまつわる事柄のさまざまを、ざっと概観しておこう。本稿で扱うのは、中国で「糖果」もしくは「糖」と呼ばれるものであり、一般に砂糖菓子やキャンディーなどを指している。大まかに、口に入れられる大きさの甘い塊、といった定義でいいだろう。したがって、ヌガーやトフィーやキャラメルなどを含むことになるが、本稿ではそれらをひっくるめてアメと呼ぶことにする。

そもそも、甘いものはいつからあったのか。甘い果実の類を除いたとしても、それ

は『詩経』にまで遡ることができる。砂糖登場以前は主に、穀物に含まれるデンプンを糖化させた水飴の類と、花の蜜に由来する蜂蜜の類を指した。サトウキビを搾ってその汁から糖を取り出すという製糖の技術じたいは、唐代には伝わっていたと言われている（季羨林『糖史』など）。

その固形物は、古来「冰糖」「糖霜」などといった名称で呼ばれ、主に薬の材料や料理の調味料などに用いられていた。明末の宋応星『天工開物』上巻「製糖」に「洋糖」なる語が見え、「洋」字は多く外来のものにつくことばであるが、西洋の砂糖が白く質が高いことから白砂糖を指したという。のちの清代乾隆の頃の小説『紅樓夢』にも「洋糖」が登場するが、こちらはキャンディーの類を指すようだ（第45回）。

光緒の頃、蘇州の名医であった曹滄洲^{そうそうしゅう}が、採芝齋^{さいしさい}なる店の粽子糖^{ゾンゾタン}というアメを西太后^{せいたい}に献上した話も有名である。円錐形をしている粽子^{えんすい}のかたちからその名がついた。それを西太后がいたく気に入ったことで、献上品の定番となり、巷で非常に流行ったという（王稼句著『姑蘇食話』273-274頁）。

古来より伝わるアメを用いたイベントに、年末に天上へ帰る竈神^{そうしん}を送る祭がある。これは一家のすべてを一年のあいだ見ていた竈^{かまど}の神が、年末にその罪過を天帝へ報告できないよう、水飴をその像の口に塗り付けたりするものだ。これに類するものは漢のころからあったと言うが、アメを用いるようになるのは、文献上は南宋のころと言われる。もともとはその粘りをもって「口を開かなくさせる」効果を狙ったものだったが、後にその甘味をもって「報告を甘くさせる」効果を期待するようになり、それに伴い、供える物も水飴に限らなくなってゆく（以上、[清]顧禄『清嘉録』「十二月・念四夜送竈」および東洋文庫版の中村喬氏の注など参照）。

清末に中国に滞在したアメリカ人宣教師ヘッドランド（Isaac Taylor Headland, 1859-1942）が集めたわらべ歌に、こんなものがある。

小脚兒娘愛吃糖	小さい足の娘さん アメを舐めるのだーいすき
沒錢兒買	買いたくっても金がない
搬着小脚兒哭一場	よちよち買いに行って ひとしきり泣いた

（ロビン・ギル著『中国のマザーグース』6-7頁、星野孝司氏による和訳参照）

これは、纏足の娘の日常をもの悲しく歌ったものと言えるが、ときに、意味を考えない子どもに元気よく歌われもしただろう。このアメは、果実に水飴の類を絡めた糖フルー^{フルー}（図2-a）のようなものか、蜜にナッツなどを練り込んだものか。こういったアメ売りの多くは、客引きの際にドラを叩いたといい、北京にはそのまま「打糖鑼^{ダータンルオ}の（アメのドラを叩く者）」と呼ばれる行商人がいた（図2-b）。彼らは子ども相手にアメのほか、玩具などを売ってまわった。図中で子どもに渡している包みには、菓子^{タン}の類が

入っていよう。このほか街には、アメで絵を描いたりフィギュアを作ったりするアメ細工職人（図 2-c）がおり、いまでも彼らには、中国各地で出会うことができる。

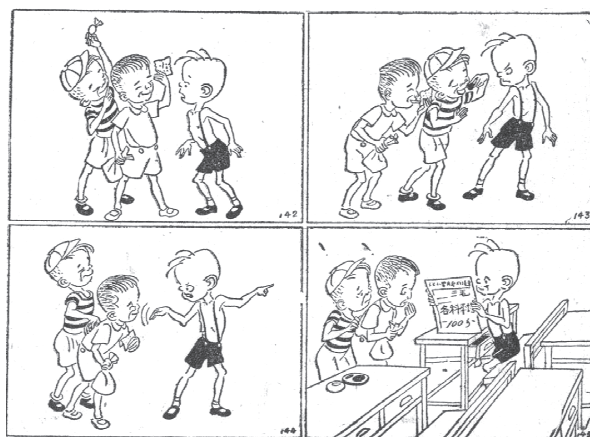


2. a 糖葫蘆売り / b「打糖鑼的」 / c アメ細工職人
侯長春絵画『旧京風情』（中国電影出版社、1999）より

民国に入るとキャンディーの類が多く登場するようになる。文学者の蘇曼殊^{そ まんじゅ}（1884-1918）は、「糖僧」（^{さんぞうほうし}「唐 僧」と同音）の異名を持つが、その甘党ぶりについてはみずから、摩爾登^{モルドン}なる名のアメを日に三袋も食べているとの由、人に宛てた書簡の中で告白している。摩爾登については不明だが、彼によれば、茶花女^{つばきひめ}が好んで食べていたものらしい（1912 年 8 月の某君に宛てた復信より。花城出版社版『蘇曼殊文集』下 545-546 頁参照）。

解放直前に上海の『大公報』で連載された張樂平^{ちょうらくへい}（1910-1992）のマンガ『三毛流浪記』^{サンマオ}（1947-49）を眺めていると、アメ是三毛をいじめる少年たちの持ち物であったりする。

例えば右の「だれのがいいか（看誰的好）」（1947 年 8 月 27 日）と題されたはなし（図 3）。学校でバスケットとアメを「どうだ」と自慢される三毛が、悪ガキ二人を自分の机のところに連れてきて、じしんの百点の答案を「どうだ」と見せ返すというもの。

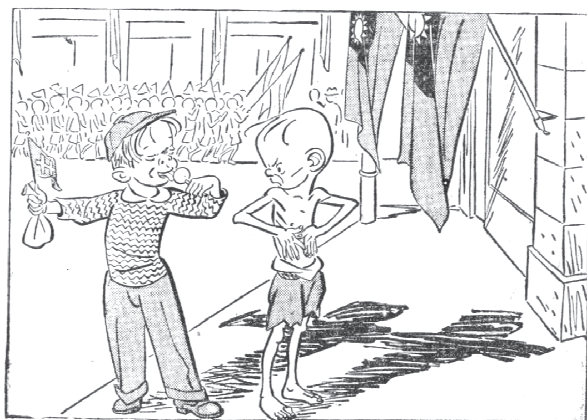


3. 『三毛流浪記』より「看誰的好」
（左上から始めて、横書き文のように読む）

もう一枚は、「十月十日の街角（双十街頭）」（1948 年 10 月 10 日）と題されたもの（図 4）。10 月 10 日は、中華民国の建国記念日であり、祝日に賑わう街角で、長袖長ズボンの男の子がアメを見せびらかしながら、半裸の三毛をからかうといった、

上と同様のシチュエーションを描いたものである。二人の少年の影が二つの「十」字を形作るあたり、張楽平の遊び心がうかがえる一枚と言えるだろう。

これら二枚の図版が示していることは、アメはつまり、子どもたちにとっての富の象徴であり、権力の所有を示すアイテムたりえる品であるということだろう。



4. 『三毛流浪記』より「双十街頭」

アメを包む仕事

アメを題材にした連環画に、『包糖的故事』というものがある（図 5）。1975 年の作で、「包糖」は糖を包むことを言う。これは子どもがアメ工場へ見学に行き、そこで働いている陸おばさんから、アメ工場の発展の歴史を聞くというはなし（図 6）。旧社会と解放後を並べて今のすばらしさを味わう、と言った趣向のものと言える。



5. 『包糖的故事』表紙

……陸おばさんは解放前、アメ工場でアメ玉を紙でくるむ仕事をしていた。当時大勢の子どもがその作業に従事しており、一日五千個のノルマが課されていたという。冬は手がかじかみ、夏は汗で包み紙が湿る。彼らは皮の鞭を持った資本家の手下に監視され、動きが鈍るとすぐに鞭が振るわれた。

あるときおばさんは、^{セロファン}玻璃紙を使ってアメを包んでいた。それは端が薄く硬くカミソリのように、急いで包んでいるうちに端で手を切ってしまった。血はドクドクと止まらない。紙を血で汚せば叱



6. 昔のはなしをする陸おばさん

られる、包む手を止めても叱られる。窮したおばさんは血を止めるべく、慌てて指を口にくわえた（図7）。それを見た監視人がこう言った。

「こいつ、こっそりくすねて口に入れてやがる。はやくアメを吐き出すんだ！」

おばさんは悔しさのあまり、拳を握ってにらみ返した。すると監視人はこう畳みかける。

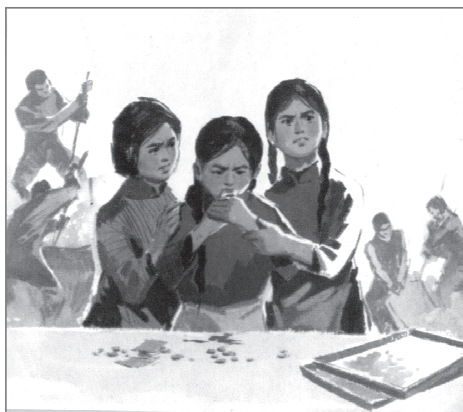
「まだ手ににぎってやがる！」

おばさんは潔白を示すべく掌を広げ、監視人に向かって行った。棒で反撃する監視人。打たれたおばさんは、痛みに耐えかね、うめき声をあげた。見かねた仲間達が束になって監視人に迫る（図8）と、彼は捨て台詞を吐いて逃げて行った。この一件があってから、おばさんは人差し指を失ってしまった。

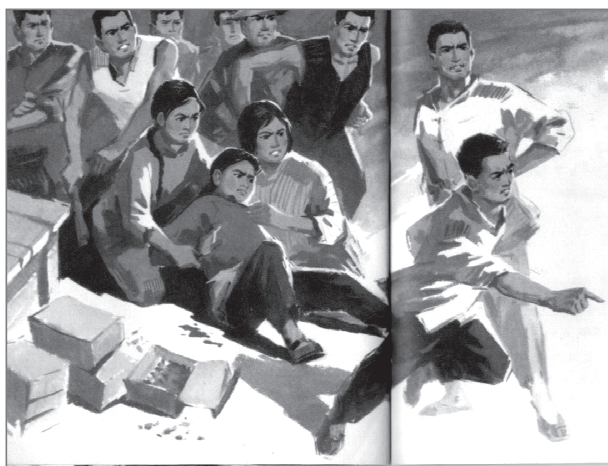
解放後、環境は徐々に改善する。作業場にはベルトコンベアが導入され、おばさんたちも流れてくるアメをただ包めばよかった。文革期にはさらに機械化が進み、包む作業にすら人の手が要らなくなった。生産できるアメの量も飛躍的に伸びていった。子どもたちはおばさんの話を聞きながら、社会主義の継承者としてよりよい未来をつくるべく決心を固めるのであった……。

（上海軽工業局工人業余創作組・龔偉写、王純言画『包糖的故事』

上海人民出版社、1975より梗概）



7. セロファンで手を切る陸おばさん



8. 仲間を庇って立ち上がる労働者たち

事件は子どもの頃にアメ包みに従事していた陸おばさんが、玻璃紙で手を切ったことに始まる。玻璃紙はセロファンを指し、それは後に、包み紙コレクターの間で熱く語られる品でもある。セロファンで手を切ることがあるとは驚きだが、とにかく物語は、旧社会に陸おばさんの手が不自由になったことを述べ、いまの子どもたちの眼前

に、その不自由さが、「旧社会の苦難」の証として示される流れとなる。その直接の原因については曖昧ながら、どうやら玻璃紙による切断ではなく監視人からの殴打であるらしい。子どもの工人を「童工」と呼び、上海では 1880 年代ころからすでに存在したと言われ、長時間労働の上に低賃金という過酷な条件下で雇用されていた。

現実の話を使うならば、解放前に瀋陽のアメ工場にいたことのある、常女士なる女性の回想（常女士口述、楊旭整理「光復時、我在包糖」、『当代工人』、2012 年第 19 期、34-35 頁）が参考になる。彼女は子どもの頃に、日本人の下、奉天の満洲製菓（満洲明治製菓株式会社奉天工場のこと）でアメ包みに従事していたそうだ。具体的には、机の上に撒かれたアメを、五センチ四方の包み紙でしっかり包み、20 個まとめて小箱に詰め、その小箱を大きな箱に入れるというもの。ノルマはなかったようだが、報酬は歩合制で、一か月でいまの十元ほどの額を手に入れることができた。また一か月のあいだ休まなければ、工場からビスケットを四斤もらうこともできた。当時ビスケットは街で見かけない品であったという。彼女からは日本人の監視と管理についての言及もあり、特にその衛生観念の厳しさに触れながら、ツメが伸びていないかや、シラミが湧いていないかなどを検査されたと述べている。また工場を出る際の所持品検査にも言及し、何か盗んで捕まったとき、日本人は打つことも叱ることもなかったが、代わりに部屋にある電気椅子に座らせて通電の仕置きをしたのだそうだ。ただし何にでも抜け道というのはあるもので、常女士もまた、工場内にあるビスケット包みのチームと連携し、互いに持ち場のものをくすね、交換し合って食べていたことを告白している。

旧社会において工場労働者となっていた子どもの苦労話は後を絶たず、解放後の児童雑誌にも時折、その種の記事が掲載される。以下は、アメ工場で働いていた子どもがいかにして解雇されたか、ということを伝える記事から、梗概を記したものである。

1947 年の夏のこと、上海天明糖果廠で見習いとして働いていた武俊儒は、朝の三時から働き始め、お昼になったところで、疲れ切って地面に倒れこんでしまった。ちょうど両手に沸騰した砂糖水の鍋をもっていたために、倒れた拍子にその熱い砂糖水をかぶってしまい、全身に火ぶくれができてしまった。他の工場労働者はそれを目にして胸がえぐられるような気持ちになった。しかし悪徳の経営者は治療を認めないばかりか、自業自得だと罵り、「大したことない、死にもしないさ、ちょっと赤チンでもつけておけばよくなるよ」と言い放った。労働者たちは彼を病院へ連れて行き、応急手当を施した。そして経営者に対して道理を説いて闘争した末、ついに治療費を支払うことを認めさせた。しかしこの見習いは退院後数日しないうちに、工場から解雇されてしまった。

（『児童時代』1965 年 16 期「資本家开除工人的形形色色」）

子どもが作業中に事故にあって怪我をしてしまい、管理人に罵られるあたり、『包糖的故事』を彷彿とさせる話である。また仲間たちが戦い、助けてくれるあたりも同様である。解放前の「童工」と言えば、きつい仕置きを受けながらの、過酷な労働といった印象があるが、後には、上の例に見るように、労働者たちが結束を強める契機として語られることもあったようだ。

児童雑誌に見えるアメの話

近ごろ文革前の『連環画報』が当時の判型で影印出版されたが、それらを紐解いてもアメへの言及はほとんど見られない。その一方で、文革前の児童雑誌をめくれば、しばしば関連記事を見つけることができる。いわゆる連環画とは異なるが、アメの話ということで、ここで雑誌『児童時代』から三つほど紹介しよう。以下に載せる四枚の図版は、いずれも物語全体に付された挿絵であること、ここに注記しておく。

『児童時代』は、1950年から上海で発行された児童向け雑誌。月二回の発行。66年に一度停刊するも、78年に復刊しそのまま現在に至るという、いわば児童向け雑誌の代表的存在である。読者については都市の、一定の階層以上の子女であったと推察され、この雑誌からは、彼らの生活や行動、思考様式などを眺めることができるだろう。まずは黄文華写、丁深画「アメを食べる計画（喫糖果訂計劃）」という話から。

……春節のある日、建華、建中、建東の三兄弟は母親から祝いの品として三袋のアメ玉を渡される。

「わたしたちの国は、すでに形作られました。あなたたちもしっかり勉強して、将来この国を春の日のように美しく、そしてその暮らしをこのアメのように甘いものとしてください。」

喜ぶ三人。妹の建東が袋を開けて一粒取り出し、まさに口に入れようとしたそのとき、姉の建華が妹を「ちょっと話をきいて」と制

止する。耳を傾ける弟と妹。建華の話は朝鮮戦争に従軍している叔叔たちのこと。

「おじさんたちは朝鮮で、慰問団にアメを手渡されたのだけど、食べるのに決まりを設けたそうなの。かつてその銃で敵を百十三人殺した呂中和おじさんは『一人殺したら一粒食べることにする』とおっしゃって、橋を修繕する役のおじ



9. 計画を練る子どもたち

さんは『橋を一つ直したら十粒食べる』とおっしゃったんですって。わたしたちも彼らにならってはどうかしら。」

姉の話に聞き入り、感動する弟と妹。

妹「あたし新しい文字を五つ覚えたら一つ食べるわ。」

弟「ばくも算数の問題を一つきちんと解いたら一つ食べるよ。」

少年隊の小隊長である姉もまた、冬休みの間、隊員を率いて課外活動を行なうこと、そして一つ事を行なったら一つ食べることを宣言したのだった。

(『児童時代』1953年第4期「喫糖果訂計画」より梗概。図9は挿絵)

春節にアメをもらうあたり、アメがすでに特別な物であったことを示している。この物語からは、朝鮮戦争(1950-53)の影と、子どもたちが戦時下におり、生活の中に戦地の英雄の物語があったことがわかる。次は陳濱・水火写、施引画「アメを食べる(喫糖)」という話。

……アメが原因で弟と喧嘩した周^{ジョウウエイ}偉くん、始業のベルで慌てて教室に駆け込んできたが、先生が話し始めても、さっぱり耳に入らない。ポケットをまさぐって、アメを一粒取り出した。口に入れると、さっきの休み時間の、弟とのケンカが頭に蘇ってくる。「ボクのアメは、アイツが盗んだに違いない。このアメはボクが買ったってのに、なんてずうずうしいやつなんだろう。授業が終わったら、とちめてやらなくちゃ……」それはちょうど地理の時間のこと、事件は、先生が「……池^{チータン}塘^{ジョウウエイ}, 周^{ジョウウエイ} 圍^{ウエイ}……(池が…周りに…)」と話したところで起こった。アメを食べていた周偉^{ジョウウエイ}くんの耳には先生のことばが「……喫糖^{チータン}, 周^{ジョウウエイ} 偉^{ウエイ}……」と聞こえたのである! 彼が自ら立ち上がって「アメを食べる? 先生、ボク……」と弁解しかけたところで、先生に口の様子がおかしいことを見抜かれてしまう。墓穴を掘るとはまさにこのこと。周偉くんは先生に言われるまま、アメを口から出し、顔を赤くするほかなかったのであった。



10. 先生、ボク……

(『児童時代』1955年第18期「喫糖」より梗概。図10は挿絵)

このアメは彼がおこづかいで買ったものという。音通が展開のカギを握るあたり、いささか「できすぎた」感も否めないが、物語からはアメに固執する子どもと、「欲張ることはやめましょう」「授業中にアメを食べてはいけません」「先生の話はきちんと聞きましょう」などの教訓を読み取ることができる。

上の二つがいずれもアメにまつわる良い子と悪い子の話であるのに対し、次に紹介する周瑋傑写、何中達画「アメ（糖）」は、悪い大人の話である。

……^{シャオボー}小坡が放課後、友人らとともに
^{ジャンウエン}張文の家で復習に励んでいると、張文のお父さんがやって来て、感心とばかりにアメを配りだした。小坡の心には疑念がおこる。張文のお父さんは確かにアメ工場を開いてはいるけど、今までにこんなことあったかしら？ 次

の日もまた同じ事が起こったので、小坡はたまらず理由を尋ねた。すると張文のお父さんはこう答えた。いわく、国営企業の取り締まりが厳しくなって、一人あたりの砂糖の購入量が限られてしまったのだとのこと、ついてはみな一人一人に、砂糖を買いに行行って欲しいということだった。

小坡はスッキリしない気持ちだったが、張文に指示されるまま、放課後に砂糖を買う列に並ぶことになる。そのうちに、復習はおろそかになり、帰宅も遅れがちになり、母親には「問題がなかなか解けなくて」とウソをつくようになる。次第に小坡のアタマでは、さまざまな負の気持ちが渦巻くようになっていった。「張文のお父さんはあんなに砂糖を手に入れて、全部アメを作るつもりなんだろうか？」「もし今後こんな風に並ぶようなら、ボクの勉強はいったい……？」しかし断ることもできない小坡。そんなある日、列に並んでいるところを担任の楊先生に見つかってしまう。それがきっかけとなり、小坡は謎の病に倒れ、夜には「ボクに砂糖を一袋下さい！」とうなされるまでに。ここに到り、ついに楊先生が調査に乗り出し、母親にも一切がばれてしまうこととなった。

二週間後、体調が戻った小坡は、家の向かいで張文の父親が政府の調査を受けていることを目にする。なんと張文の父親は、砂糖がないとアメが作れないと言って代わりに買いに行かせた砂糖を、大量に倉庫に保管していたのだった。その量、ゆうに二千斤。それらはすべて押収され、張文の父親も連行されていった。

（『児童時代』1955年第17期「糖」より梗概。図11-12は挿絵）



11. 甘い話を持ちかけるおじさん



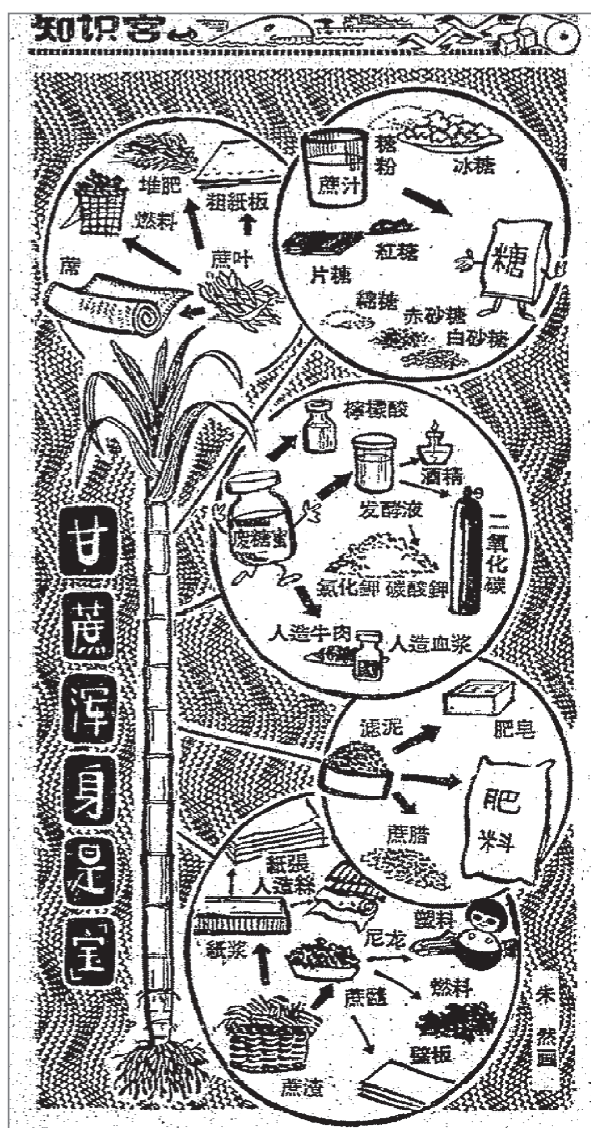
12. 砂糖を買いに並ぶ子どもたち

まさしく「うまい話には気をつけよ」型の話。子どもが大人に導かれて悪の道に手を染めてゆくようすと、それに疑念を抱きつつも抗いきれずに逡巡するさまが、極めて丁寧に書かれている。そのきっかけとなるのがアメであり、しかもその悪い大人が、向かいの家に住んでいる友人の父親であるあたり、子どもたちの身近にその入り口が潜んでいることを伝えている。政府の引き締めにより今後は悪い人が増えるから、子どもたちも注意して暮らさないといった趣旨の教訓が受け取れるのだが、こんな話を聞いた日には、おちおちアメももらえない。アメが逆に人間関係をぶちこわす、そんなお話。

児童雑誌にはまた、科学啓蒙的な側面からアメを紹介する記事も少なからず見られる。ここで、アメに関連する画像を二枚ほど紹介したい。

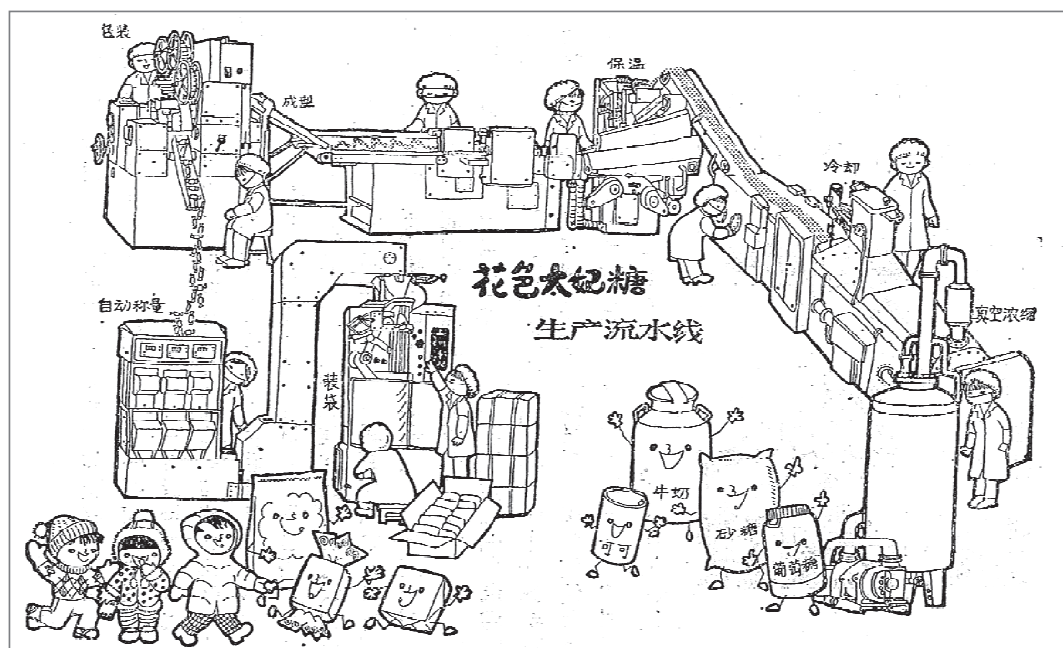
一枚目は65年の『児童時代』第3期「知識宮」から、「サトウキビは上から下まで宝物（甘蔗渾身是宝）」（朱然図）と題されたもの（図13）。これは、砂糖の原料となるサトウキビが、まるごとくまなく利用可能な存在であり、それぞれの部位がどのように人々の生活に役立っているかを図示したもの。説明によれば、甘蔗からは、砂糖は言うまでもなく、繊維や堆肥や燃料、石鹼にプラスチック、アルコールや人造の牛肉や血漿までもとることができるのだという。

もう一枚は、85年の『少年科学』第2期から、「花色^{トフィー}太妃糖ができるまでの流れ（花色太妃糖生産流水线）」と題されたもの（図14）。「花色」はバラエティーに富んでいる色や形を指すが、ここでは固有名詞だろうか。トフィーはバターや砂糖などから作る茶色のキャンディー。図は、トフィーがどのような工程を経て出来上がるのかを俯瞰している。



13. サトウキビは上から下まで宝物

糖や牛乳や力カオの類を溶かし、冷やし固め、保温・成型し、包装・計量し、袋詰めするといった工程を、図で見せてくれている。紙上の工場見学といったところか。

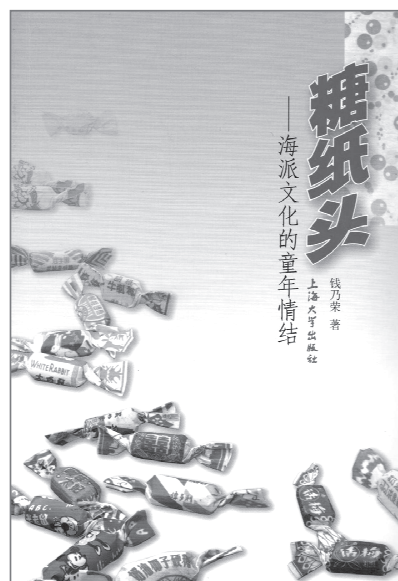


14. 花色太妃糖ができるまでの流れ

包み紙のはなし

ここからは、アメの表面を彩り、清潔に保つための包み紙を見てゆくことにしよう。それは、当時の少なからずの子どもたちに、切手やコイン、映画のチケットや明星のブロマイドに並んで、集めるに値するものと見なされていたようだ。花びらや木の葉と同様、わりにお金がかからず、集めやすいものだったことも理由という。それは「糖紙」^{タンジートウ}「糖紙頭」などと呼ばれ、いまなお多くの収集家が存在する。

上海大学の教授であり、上海語の専門家である銭乃荣氏に、その名を冠した極めて美しい本がある。名を『糖紙頭——海派文化的童年情結』（上海大学出版社、2011）という（図 15）。副題の「海派文化」は上海文化をいい、「童年情結」は子ども



15. 钱乃荣著『糖紙頭』表紙

も時代の^{コンプレックス}情結のことだが、つまりはそのこだわりや愛着といった意味でいいだろう。包み紙の図版を、オールカラーで豊富に載せている。

氏によれば、上海は 50 年代、アメの生産が盛んであり、さまざまな工場が、アメの質と、その包み紙の図案の質において、しのぎを削っていたという。アメ自体の種類も多様で、おおまかな^{ハード}硬糖、^{キャンディ}軟糖、^{ソフトキャンディ}糖といった区別^{トフィー}の他、外国由来の例えば太妃、^{バター}白塔、^{スガー}牛軋（鳥結、紐結とも）などが出回っていたようだ。その上それぞれがさまざまな味付けを施されて、チョコレートや多様な果汁、コーヒーにソーダ、ナッツにゴマ、中にはネギ味というものまでもあったらしい。本稿に挙げた包み紙の図版は、すべて銭氏の本からの転載（図 16-18、図 23 も）だが、見れば分かるように、図案はアメを包む機能のために、たいていが、両端と中央の三列、二種の意匠が組み合わせられたものとなっている。工場名と品名の表示を除けば、直線と曲線に幾何学模様が配置された上に、動植物や人物、花火や玩具やミッキーマウスなどが配されている。材質は、上に挙げた玻璃紙を除けば、大半はロウ紙であったようだ。

包み紙に関する話として、^{てつぎょう}女流作家の鉄凝（1957-）に「一千枚のアメの包み紙（一千張糖紙）」（1992）というエッセイがある。これは彼女が幼少の頃の包み紙の思い出を綴ったものである。

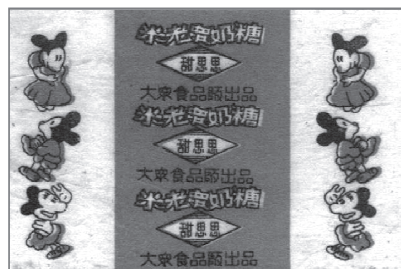
……小学校一年生の鉄凝が、夏休みに、北京の親戚の家にいたときのことであった。友人の^{シーシャン}世香と中庭で騒いでいると、鉄凝の親戚のおばさんが彼女たち「騒いでないで、包み紙でも集めたら？」と提案する。理由を尋ねる少女たちにおばさんは、包み紙を一千枚集めると、デパートでロボットの犬（電腦狗）と交換してもらえるのだという。これは娯楽の少ない時代の少女たちを喜ばせ、彼女たちを包み紙集めに熱中させた。おこづかいでアメを大量に買って一気に食べたり、食料品店でアメを買う客の後を追ったり、親戚の結婚式に潜り込んで式場に落ちている紙を拾い集めたりした。



16. 黒猫牌「果汁太妃」



17. 天明牌「葱香麦乳糖」



18. 大衆食品「米老鼠乳糖」

集めた紙は二人で丁寧に、一枚一枚洗って、窓ガラスに貼り付けて乾かし、平らに延ばした。そして苦労の末に少女たちは、二人で二千枚、ロボットの犬二匹分の包み紙を集めるに至る。喜んでおばさんのところへ報告に行くと、彼女はさんざん笑い、涙を拭きながらこう言い放った。「あんたたちがうるさいもんで、ちょっとからかったのよ。」少女たちはあっけにとられるほかなかった。……

(鉄凝『一千張糖紙』、鳳凰出版社、2006、7-9 頁より梗概)

続いて少女たちは、その二千枚のアメの紙を天空へと撒き散らし、このイベントを終了させる。鉄凝は結びに、ウソだと知ったときの落胆がいかなるものであったか、子どもは叱ってもいいが、決して騙してはいけないものなのだと主張し、誰もが昔は子どもだったのに、といった筆致でエッセイを閉じる。二人の女の子が、機械仕掛けの犬を夢見て、必死で包み紙を追いかけるあたり、胸を打つはなしではあるのだが、いくら子どもを黙らせるためとは言え、残酷なウソをつくおばさんもいたものである。自伝的に書かれてはいるが、創作要素が多いものだと信じたい。

上にも触れた画家の静茹もまた、少女時代に包み紙を集めた思い出があるという。

70 年代、男の子が集めたのは主にタバコの箱であり、女の子が集めたのは主にアメの包み紙であった。

紙製の包み紙はそれほど追いかけてもせず、みんなが一番喜んだのが「プラスチックガラス紙」の包み紙であった。当時透明なプラスチックの包み紙をわたしたちは「ジャンヤンガラス紙」と呼んだ。わたしたちはアメを舐めてしまうと、包み紙を水できれいに洗って、窓に貼り付ける。そうすると、包み紙の皺は自然に伸びるのだ。乾けば丸まって自然に落ちてくるので、わたしたちは平らになった包み紙を本の間に挟むのである。…… (略)

(静茹氏前掲書 114 頁。図 19 は挿絵)



19. 洗った包み紙を窓に貼る

包み紙を窓に貼り付ける行為は、コレクターたちの常套手段だったようだ。ちなみにタバコの箱については、ジャンヤン張揚監督の映画『胡同のひまわり』(原題『向日葵』、2005)フートンに、それらを集めて遊ぶ男の子たちの姿が収められている。

そんな風を集められた包み紙は、ただ本の間に挟まり、眺められていたばかりでは

ないらしい。静茹は上の記述に続けて、以下のような思い出を記している。

包み紙はさらに別の遊び——「埋花窖」——をすることができる。「埋花窖」は基本的に女の子が遊んでいたもので、わたしたちは包み紙の一番きれいな部分を探して、ガラスのカケラの下に（訳者注：デザインの側をガラスに付けて）敷き、はみ出た部分を切りとって、包み紙とガラスの形を合わせるのである。



20. 「埋花窖」に興じる少女たち

もし茶色のガラスや緑色のガラスを見つめることができれば、「花窖」はもっときれいなものになる。……（略）……

小さいときよく、他の人を、自分が埋めた「花窖」を見せに連れていったものだ。みんなが壁の足もとに這いつくばると、わたしが手で注意深く土を掘る。すると少しずつ掘り返されて、この瞬間がもっとも不思議であるのだが、土の中から突然、不思議な色つきガラスが現れるのである。わたしは当時さらにさまざまなアメの紙を組み合わせ、人の意表を突くような模様を作り上げたりすることができた。これは誰も真似のできないことだった。……（略）

（静茹氏前掲書 115 頁。図 20 は挿絵）

「花窖」は色鮮やかな穴蔵、とでも言った意味か。静茹はさらに、包み紙で作った鮮やかなガラスを数枚用い、独創的に重ねた上で埋め込んだりもしていたらしい。これはつまり、味気ない黄土色の地面から、鮮やかな模様入りのガラスを掘り当てる遊びである。彼女たちにとってそれは、地中に潜んでいる宝石のようにも見えたことだろう。

その他、本誌三号でも取り上げた何富成^{かふせい}『虫虫的尖叫——何富成漫画童年』（寧夏人民出版社、2006）に「家の壁は彩り鮮やか、ボクがボロクズの王さまだから（家裡牆上花花緑緑，都因我是個小破爛王）」（14 頁）と題された絵が収められている（図 21）。それは、子どもが母親に「また包み紙を拾ったよ！」と言いながら、うれしそうに手渡す場面を描いたものだ。受け取る母親もうれしそう。机に置かれた容れ物にあるの



21. 家の壁は彩り鮮やか

は糊だろう。彼女は包み紙を使って、背後の壁面を修繕し彩るのである。

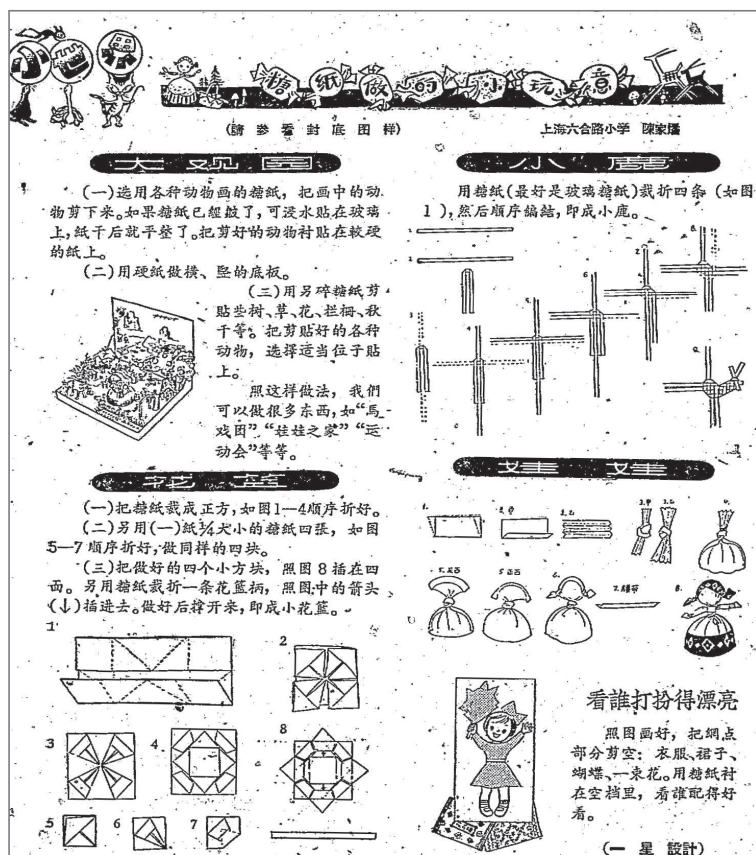
また上海の児童向け雑誌『児童時代』では、包み紙を使った子どもの手遊びを紹介している（図 22。1962 年 5 月 1 日、第 9 期より）。

子どもの手遊びのページは、民国時期に児童向け雑誌がまた登場するようになってこの方、頻繁に目にする定番のコーナーであるが、多くは馬糞紙（ボール紙）が道具として用いられ、包み紙を使うのは珍しい。この回は包み紙で、箱庭、鹿、花籠、人形の四品を手作りするよう、指南している。箱庭に配置される動物たちは、包み紙に描かれたそれを切り出して作ることが求められている。ただし、

全体的に簡素な説明のわりに複雑な仕上がりのようなだから、実際にどのくらい子どもがついて行けたものかは不明である。

62 年と言え、58 年に始まる大躍進政策の影響により、大量の餓死者を出した時期に重なる。そんな国家的危機の中で、なぜアメの包み紙が取り上げられたのかは定かではないが、裏表紙にアメの包み紙によるデザイン画（戴敦邦による設計）があることを考えると、ひょっとしたらアメ会社からの、例えば資金提供といった、何らかの働きかけがあったのかもしれない。あるいは今まで収集していたものを使いなさいといった趣旨の、やはり節約を奨励する流れの下にある企画だろうか。

上に見るように、色もデザインも凝らされた包み紙は、子どもたちによって眺められ、集められ、交換され、飾られ、そしてときに遊ばれていた。それはつまり、小さな方形の紙に奇想と意趣を盛りこんだデザイナーたちの思いが、子どもを中心とした人々によって、存分に味わい尽くされていた時代だったと言えるだろう。



22. 包み紙を使った手遊び指南

装置としてのアメ

余華（1960-）の長編小説に『兄弟』（原題同じ。2005-06）がある。これは 50 年代末に生まれた宋鋼と李光頭^{リーグアントウ}という、親同士の再婚により結ばれた兄弟が、激動する社会の中、どのようにして生き抜いていったかを描いた悲喜劇である。

アメは、物語前半部「文革篇」において重要な役割を果たす。それは親同士の再婚の日の「喜糖^{シータン}」（結婚式に用意されるアメ）のおいしさを忘れられない新しい兄弟たちに、父親の宋凡平から新たに手渡された二粒のソフトキャンディーがきっかけであった。それは幸せな夜の場景を甘く彩るものとして、以下のように織り込まれる。

宋凡平と李蘭^{リーラン}は夫婦になり、宋鋼と李光頭は兄弟になり、二つの家庭が一つの家庭になった。李光頭と宋鋼は手前の部屋に寝て、李蘭と宋凡平は奥の部屋に寝た。その夜、二人の子供は大白兔^{ダーバイトゥ}キャンディーの包み紙を大切にもってベッドに入り、夢の中でも大白兔ミルクキャンディーと逢えるように、包み紙に残っているミルクのにおいを嗅いだ。眠りに落ちる前に、李光頭は奥の部屋のベッドがギシギシと音をたて、母がウンウン言って泣いているのをずっと聞いていた。アーアーと泣きながら叫んでいるのが聞こえる時もあった。この夜の母の泣き声はこれまでの泣き声と違う、と李光頭は思った。泣いているわけではないようだ。窓の外の小川を小さな船が通り過ぎた。ギシギシと鳴る櫓の音は、李光頭の母が奥の部屋でたてている音に似ていた。

（泉京鹿訳『兄弟』、2010 年の文春文庫版、上巻 89 頁を使用）

大白兔は大きな白ウサギのことで、大白兔キャンディーは、中国人なら誰もが知っている有名ブランドのミルクキャンディー（図 23）。1972 年のニクソン訪中の際に周恩来が送ったものとも伝えられる。李光頭にとってこのアメは、いつも泣いてばかりいた母の運命を変えた日の喜びの品であり、その喜びをともに分かち合う兄弟との絆の役割を果たしている。包み紙を寝床に持ち込んで匂いを嗅ぎながら眠る少年がいじらしい。

この兄弟は、後にいつとき離れることになるが、遠くから歩いて李光頭の元にやって来た宋鋼が、弟への土産^{みやげ}としたのがこの品であった。以下は、家に閉じこめられた李光頭に、宋鋼がドアの隙間からアメを渡そうとする場面である。



23. 大白兔キャンディー（銭氏前掲書より）

宋鋼のミルクキャンディーは、ドアの隙間の外側にくっついている。李光頭は

内側から隙間に鼻をくっつけた。思い切り息を吸うと、やっとのことで微かにミルクの匂いがかげた。李光頭は思わずワーワー泣き出した。宋鋼がドアの外から言った。「李光頭、どうして泣いているの？」

李光頭は泣きながら言った。「大白兎ミルクキャンディーの匂いがかげた」

宋鋼はドアの外で、ゲラゲラ笑い出した。李光頭も宋鋼の笑い声を聞き、泣くのをやめて笑い出した。李光頭は泣いては笑うのを繰り返した。やがて二人の子供はドアによりかかって地べたに座り込み、ドアを隔てて背中合わせにたくさんおしゃべりをした。

(同書 299 頁)

『兄弟』の「文革篇」は、汚穢と性欲、飢餓と暴力が至るところに顔を出し、人々の地を這うような生の営みを記す、その執拗な筆致にむせかえるほどであるが、そんな中、この大白兎キャンディーが一服の清涼剤となっている。上の引用のあとにある場面、建物の外から宋鋼が、空腹に駆られておみやげのアメを一つ食べようとするも、匂いだけ嗅いでやめる、といったくだり (303-304 頁)、そのいたいけなふるまいがあまりにせつない。ここにあるのは、高畑 勲 ^{たかはたいさお} 監督のアニメ映画『火垂るの墓』(野坂昭如原作、1988)に見られたような、子どものアメへの強い渴望である。ただし、『兄弟』後半の「開放経済篇」を読み進める中で、大人になった兄弟たちの間に再び大白兎が登場することを、そして安く泣かされることを期待したが、余華はそのようなアメの使い方をしなかった。あるいは、あまりに感傷的に、大衆的に流れるのを嫌ったためかも知れない。

かつて「憶苦飯」^{イークーファン} というものがあった。これは解放前の貧者の食事を模したもので、文革期の思想教育の中で、「憶苦思甜」^{イークースーティエン} ということばとともに全土に広まっていった。「憶苦思甜」とは、「憶苦飯」を食べるなどして旧社会の苦しみを体験し、そうすることで現在の幸せな生活を噛みしめる、といった意味である。つまりは党が、本来の味覚とは別に、人々のアタマをそういう回路にするべく導こうとしたものであるが、アメもまた、われらの感覚を麻痺させる品として、名を挙げるに十分な資格がありそうだ。なぜならそれが、甘みのみならず、苦みや塩気や、また時にそれらとも違った「味わい」を、われらに感じさせることがあるようだからである。